

### 自己評価及び外部評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0170400097		
法人名	社会福祉法人 宏友会		
事業所名	グループホーム風車の家 Aユニット		
所在地	札幌市西区宮の沢490番地87		
自己評価作成日	平成22年5月24日～7月31日	評価結果市町村受理日	平成22年10月5日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度の公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先URL	<a href="http://system.kaigojoho-hokkaido.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0170400097&amp;SCD=320">http://system.kaigojoho-hokkaido.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0170400097&amp;SCD=320</a>
-------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人北海道社会福祉協議会		
所在地	〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目1番地		
訪問調査日	平成22年8月19日		

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・入居者が人として当たり前の姿で生活できるように、いかに、入居者が頭と体を自分で使って生き生きと暮らすか、という意識での支援を心掛けている。その為に、入居者の出来る事・出来ない事的確な把握には力を入れており、職員の支援が過剰なものになっていないかの見直しを常々行っている。

・ケアプランは、職員の努力目標にならないように気をつけ、入居者本人の「今」の声と状態を大切にしながら、入居者が居心地良く生活できる場の提供に努めている。

・担当同士での話し合いを密に行ないながら、チームワーク力を身につけたい。

・入居者は、施設の一員ではなく地域社会の一員である為、積極的に地域と関わりを持てるよう支援している。今後も更に地域との関係作りにも力を入れていきたい。

#### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は、同一法人が運営する特別養護老人ホームと近接しており、機能訓練指導や緊急時のバックアップ、施設内研修等で連携を図りながら、より良いケアサービスの提供に努めている。センター方式のアセスメントシートを導入して利用者理解を深めるとともに、利用者一人ひとりが有する能力を活かし、生活の主体者として過ごせる支援に取り組んでいる。シート記入は家族の協力を得ており、豊富な情報量はケアプランを一層充実したものにしている。また、過剰介護を控え、利用者の残存能力や潜在能力を引き出すケア実践は、身体機能の維持、向上につながり、利用者の自力歩行を支えている。家族との関係は良好で、面会頻度や行事参加に表れている。管理者、職員はともに利用者本意のケアサービスに日々努めながら、より質の高いケアサービスの提供に向けて研修や自己研鑽に努めており、職員一人ひとりが自己評価全項目に取り組んでいる。地域との協力、連携体制のさらなる強化を目指しながら、利用者が安心して地域生活を継続できる支援に取り組んでいる。

#### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)
57	利用者や職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	66	職員は、生き生きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない		

自己評価及び外部評価結果

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	運営推進会議で、地域をテーマとした話し合いを何度か実施しており、それを踏まえ理念の追加を検討している。又、理念は職員全員で共有しケアプランに反映するなどして実践に繋げる努力をしている。更に理念の大切さについて話し合いたい。	職員で作り上げた理念を反映したケアプランを作成し、実践につなげている。また、地域密着型サービスの意義を確認する話し合いを繰り返し、事業所と地域が双方向の関係を強化しながら利用者の地域生活の継続支援に取り組んでいる。	具体的実践には既に取り組んでいるが、運営推進会議で討議した内容を踏まえた理念の追加を検討している。実現に期待したい。
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内の催しには積極的に参加している。近隣の幼稚園にも徐々に気軽に遊びに行けるようになっていく。今後は、施設での催しも積極的に案内していきたい。	利用者は地域の一員という意識を持ち、ひな祭り会など町内の行事に参加している。日常的に散歩や買い物に出かけ、その際、近隣の幼稚園を訪れるなど交流機会も徐々に増えている。地域ボランティアの受け入れも積極的に行っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議において情報や知識の提供をする機会はあるが、まだまだ還元しきれない。回覧板を活用して施設の存在や相談に来てほしい旨を積極的に呼びかけていきたい。		
4	3	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、毎回施設の行事報告と、その時に合ったテーマを決めて行ない、会議の内容は議事録でいつでも閲覧できると共に、定期的に行なわれる職員会議で発表し、サービスの向上に活かしている。	運営推進会議では、事業所の行事内容や取り組みについて報告や意見交換を行うとともに、認知症や高齢者虐待防止法、防災に関する知識の共有を図っている。家族発案による家族交流会形式の会議も実施し、サービス向上に活かしている。	
5	4	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	管理者は、市と区が主催する会議には積極的に参加していると共に、日頃から市の担当者には相談をよくしている。また、市から委託された実習生の受入れを行なっている。	市の担当者には、日ごろから利用者に関して積極的に相談しており、連携を深めている。市や区の管理者会議、連絡協議会に参加するとともに、認知症介護実践者研修実習生を年5回受け入れ、市との協力関係を築いている。	
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関の施錠は、防犯上夜間のみ行なっているが、日中は自由に入出りできる状態である。職員は、身体拘束に関する施設内外の研修には積極的に参加するようにし、その理解に努めている。	日中、玄関は施錠しておらず、利用者が自由に入出りできる。職員は、身体拘束に関する内、外部の研修に参加して意識向上を図り、拘束のないケア実践に取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることのないよう注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止法について、施設内外の研修には積極的に参加している。運営推進会議の中でもそのテーマを取り上げ、構成員と共に学ぶ機会を作っている。また、法には触れなくとも入居者自身が虐待だと感じるような支援をしない様に心掛けている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	実際に、日常生活自立支援事業を活用している入居者がいるため、必然的に学ぶ機会はあるものの、十分に理解できていない部分もある為、今後必要に応じて学ぶ機会を設けていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用者や家族には、出来る限り事前に施設を見学してもらい、施設の雰囲気を知ってもらってから契約してもらうようにしている。契約締結時・解約時は十分に話し合いの場を設け不安などが無い状態であるように努めている。		
10	6	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議、ケアプラン作成時、行事後のアンケートにおいて要望等を知る機会がある。普段の会話からも気持ちをくみ取る様にしている。挙げた要望等は、会議において職員間で共有し運営に反映出来るように検討している。	日ごろから利用者、家族が意見や要望を表出しやすい関係づくりに努めている。また、家族中心の運営推進会議も実施しているほか、行事後のアンケート等で要望を吸い上げる工夫をし、出された要望は会議で話し合い運営に反映している。	
11	7	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議において、管理者と職員は意見交換をする機会があると共に、日常生活の会話からも職員の意見等をくみ取るようにしている。管理者は、職員の意見等を法人の会議において伝達している。より多くの意見交換が出来るような工夫をしていきたい。	全員参加の会議や日常の会話において、管理者は職員と意見交換する機会を設け、全体会議や内部研修の在り方等運営に反映している。新人職員については個別面接の機会を確保しており、管理者は全職員との定期的な個別面接の必要性を感じている。	給与明細を手渡す際に職員と意見交換するなど工夫しているが、管理者は職員との定期的な個別面接を検討中である。実現に期待したい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	定期的な昇給、勤務年数に応じた表彰、勤務状況の見直し、キャリアパス制度を来年度導入に向けて整備中、など職場環境の整備はされている。管理者は、職員に年度毎の目標を立ててもらい、目標共有しながら、一人ひとりが自己啓発できるような工夫をしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修委員を中心に施設内外の研修計画が立てられており、研修の機会は十分に確保されている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	区の管理者会主催の職員勉強会に参加したり、他の外部研修の機会は多くある。また、実習生の受け入れも行なっている為、同業者と交流する機会はある程度確保されている。今後更なるネットワーク作りをしていきたい。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用者には出来る限り事前に施設を見学してもらい十分に話し合いの場も設けてから契約に至っている。入居前の生活等の情報も関係者と連絡を密にとり、職員は予め本人の情報を十分に把握してから本人を迎えるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族にも出来る限り事前に施設を見学してもらい、施設の雰囲気を知ってもらってから契約に至っている。入居前には十分に話し合いの場を設け不安などが無い状態であるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前には十分に話し合いの場を設け、入居前の生活等の情報もより多く得るようにしながら、本人にとって「今」何が最善かという事について、家族も含めた関係者と話し合いを重ねている。		
18		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	基本的に職員も利用者も「出来る事は自分で行なう」という姿勢で生活しているので、お互い助けたり、助けられたりという関係が自然と生まれていると感じる。		
19		○本人を共に支え合う家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	幾つかの行事の際には家族参加を促している他に、基本的に病院受診は家族対応としており、家族が「預けっぱなし」という気持ちにならないように配慮をしている。又、支援に対する話し合いを家族と常々行ない、最善の策を家族と共に考えるようにしている。		
20	8	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会や外泊は自由である。隣の施設に移った入居者へ面会しに行ったり、昔働いていた場所を見に行ったりしている。今後も、入居者の馴染みの人や場所を知る努力をし、積極的な支援を心掛けていきたい。	利用者が昔働いていた場所を訪れたり、友人の訪問を受け入れたりして、関係継続の支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	基本的に「出来る事は自分で行なう」という姿勢で生活しているので、お互い助けたり、助けられたりという関係が自然と生まれていると感じる。職員も、入居者同士の関係作りは常に意識をしていて、入居者が自ら関係を気づけるような触発や支援を積極的に行なっている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後も移動先の施設や病院に、職員や他入居者が面会に行く事がある。また、退去後であっても、家族が相談に来たり、近況報告してくれる。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	9	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	今年度から、より深く入居者の想いに触れる事が出来るようにセンター方式を活用している。今後も、積極的に本人の声を聞くと共に、想いを表す事が困難な入居者の想いの汲み取りに力を入れていきたい。	職員は、声かけを行ったり、言動から利用者の意向の把握に日々努めている。アセスメントシートの一部を家族に記入してもらい、情報の共有、充実に努めながら本人本意の暮らし方を支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	より多くの情報を得る為に、今年度からセンター方式を活用している。入居前も本人を支える関係者から十分にアセスメントしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	自分で出来る事は自分で行なうという生活を支援する為には、個々の能力等の把握は必要である。変化に伴った見直しをしながら的確に能力などを把握できるように努めている。		
26	10	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	センター方式を活用したことにより、本人と本人を支援する関係者の思いやアイデアを共有しながら、より現状に即したプランの作成が出来ている。今後は更に家族の意見を積極的に取り入れていくように努めたい。	アセスメントシートの一部を家族が記入し、担当職員が原案を作成した後、全職員参加のカンファレンスを経て介護計画を作成している。6ヶ月ごとに評価と見直しを行うが、新規利用時や状態変化があった場合には、状況に見合った短期の暫定プランを作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日、入居者一人ひとりの様子を記録に残し、体調不良や受診等の重要事項は赤字で記入するなどして、情報共有し易い様に工夫をしている。記録用紙のポイントを十分に活かした記録方法が課題である。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	職員は、いつでも「やってみよう！」という姿勢があり、以前から続いている支援に囚われず、目の前にいる入居者にとって最善の支援策を考えるようにしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	町内の催しに参加したり、近隣へ気軽に買い物出掛けたり、消防職員を招いた避難訓練を実施している。今後、個々が必要とする資源の把握に努めると共に、SOSネットを活用するなどして、安全面は更に力を入れていきたい。		
30	11	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時には主治医や救急搬送時の希望を確認し、その関係を継続できるようにしている。また、内科医と歯科医の協力病院があるので、必要に応じて往診を受けることが可能である。	本人及び家族の希望に沿ったかかりつけ医を受診出来るように支援している。また、協力病院による2週毎の定期往診、必要に応じた歯科の訪問治療など、適切な医療を受けられるように支援している。	

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師はいないが、施設内研修や新人研修で医療知識を教わっている。入居者の事は、主治医と常々相談しながら適切な受診が受けられるように協働している。協力医の定期往診時には、事前に入居者の様子をFAXでお知らせしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には速やかに介護添書を提供し、入居者が安心して入院生活を送る事が出来るよう、また大きな状態変化が無い様に工夫している。入院中は病院と密に連絡を取り合い、早期退院や退院後の生活について相談している。情報交換時には病院関係者との関係作りも意識しながら行っている。		
33	12	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した際の、事業所で出来る範囲については、契約時に必ず家族に説明をし同意を得る。住替え時には早い段階から家族との話し合いの場を多く持ち、多くの情報の共有をすると共に、本人にとって最善の場所やタイミングについて相談している。	重度化した場合の事業所の対応や救急搬送時の希望について、契約時に家族と相談している。系列施設と連携して、家族や関係者とともに最善の方策を検討している。	今後も本人、家族の意向を確認したり、事業所が対応できる身体レベルについて、繰り返し家族に説明する機会を設けることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	不定期ではあるが、施設内研修や消防署職員による救急対応の講義やを行っている。マニュアルも整備しいつでも確認できる状態である。今後は定期的な訓練の場を設け、更に実践力を身につけていきたい。		
35	13	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	マニュアルを整備しいつでも確認できる状態にある。避難訓練は定期的に行っており、近隣の協力体制も見直したうえで、今年度より訓練の回数を増やしている。今年度の訓練は、実際に近隣の人も交えて行う予定である。	災害時避難訓練を年2回から年4回に増やし、行っている。火災通報装置を地域消防団員宅にも設置し、地域との連携強化を図っている。次回の訓練は全利用者、地域住民参加で行う予定である。	全利用者の避難経路や誘導方法の確認、地域住民やバックアップ機関との役割分担の明確化など、できるだけ実践的な避難訓練が望ましい。予定通りの実施を期待したい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	14	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者としてではなく、一人の人間としての関わりを意識している。特に、排泄の声がけや注意を呼びかける時には小声で話し、プライバシーを損ねない様に配慮している。	「礼を忘れず」という理念に基づき、利用者の人格と尊厳を尊重した接遇に努めている。個人情報については法人の個人情報保護規定に則り、適切に管理している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	出来るだけ本人が自己決定できるように選ぶ数を減らしたり、タイミングを合わせたりして工夫している。自己表現が困難な入居者の想いを汲み取る努力を重ねたい。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	今ある環境で出来る努力はしているものの、入居者一人ひとりの想いの把握とその引き出し方が不得手である。まずは、想いの把握に継続して力を入れていきたい。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問理美容時は本人の希望を確認する。外出時には化粧やおしゃれ着を勧めたり、普段も、季節と希望に合った衣類と一緒に選ぶ。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	15	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	「生きていく上で食事は不可欠」という姿勢で、自分達が食べる物は自分達で獲得し、自分達で調理をしている。その結果、食事への楽しみは増えていると感じる。	利用者の意欲や能力に応じて、職員とともに調理や片付けをしている。菜園で野菜を育て、利用者が自ら収穫して味わう楽しみを支援している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	献立作りを業者に依頼している為、必要なカロリーを摂取出来ている。食事は全員毎食後、水分量は必要に応じてチェックしている。今後は、水分摂取を好まない入居者への支援に力を入れていきたい。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	就寝前と必要に応じてその都度の口腔ケアを歯科医と協力しながら行っている。口腔ケアの重要性について学ぶ機会を増やし、更に力を入れていきたい。		
43	16	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	オムツ使用時は、十分に職員と家族で話し合いを重ね、過度な使用にならない様、本人の能力を妨げにならない様に気をつけている。また、個々の排泄パターンや習慣に合わせた支援を行なうことで、排泄の自立へ向けている。	利用者個々の排泄パターンを把握し、自尊心に配慮しながら声かけや時間誘導など、きめ細かな自立排泄に向けた支援をしている。残存機能を維持するため、日中は出来るだけオムツを控え、トイレでの排泄を支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝食前の乳酸飲料や水分を多めに摂取する、便通を意識した運動を行うなどの取り組みはしているものの、個々の排便状況の把握が困難なケースも多く、医師との連携も図っていきたい。		
45	17	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に合わせた支援をしている	希望があった場合は、出来るだけ浴うようにしている。現在、夜間毎日入浴すること望む入居者がいる為、その実現に向けての検討を積極的に行っていくたい。	週2～3回を基本に、午前、午後の時間帯で入浴の支援をしている。入浴を拒む場合には無理強いわせず、タイミングを見計らって声かけている。入浴の時間帯が概ね決まっているため、利用者の希望に添えない事もある。	夜間入浴を視野に入れた時間帯を検討中である。利用者の体調に配慮しつつ、希望に応じた入浴支援への取り組みに期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	出来るだけ薬に頼らず、日中の活動の工夫で夜間良眠出来るように支援している。日中も、必要があれば体調を考慮し休息の時間を設ける。臥床時間は、職員の都合になりがちな為、変化に合わせた支援の見直しをしていきたい。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	全ての薬について理解する事は困難だと考えるが、職員は、最低限、薬の目的は把握できるように努力をしている。入居者個々の服薬状況を一覧して確認しやすい状態になっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居者が自発的に仕事や趣味活動を行なう事も多い。今年度よりセンター方式を活用し始めたので、入居者個々の楽しみを更に引き出していきたい。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	18	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	今の環境で出来る事は積極的にこなっていて、昨年よりも外出の機会が増えている。職員だけの力に依らず、家族や本人の力を十分に発揮してもらいながら、外出の機会を作っている。今後も、本人の希望の把握に努め、積極的に社会の一員として外出できるように支援していきたい。	菜園に野菜を採りに行ったり、散歩、調味料の買い物など、日常的に外出の機会を作っている。花見やさくらんぼ狩り等の外出レクリエーションには家族やボランティアの協力を得て、全員参加出来るように支援している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人の希望に沿って、お金の所持は自由である。買い物などでお金を使う機会はあるが、もっと積極的にその機会を増やし、入居者がお金を使う大切さについて職員間で話し合っていきたい。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙のやり取りや電話の使用は自由であるが、入居者が自発的にそれらを希望する機会が少なく、その触発が足りていないと感じる。今後、それらを意識した関わりに努めたい。		
52	19	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用部分や居室には、写真や季節に合った装飾品を飾り、話題づくりや回想のきっかけに役立っている。また、無駄な音や色には特に常に気をつけ、入居者が混乱しないような配慮をしている。	共用部分には季節感のある装飾や行事の写真を飾り、和やかな空間づくりに努めている。利用者は居間の仏壇にお参りしたり、お気に入りの場所で寛いだりしながら、穏やかに過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間と食堂は壁で仕切られている。狭い空間を幾つも作り、グルーピングし易い環境づくりに配慮している。廊下の端には少人数用のソファを設置し、他から少しだけ離れた時に活用できる場所作りをしている。		
54	20	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居前・見学時には馴染みの家具の持込について説明すると共に、パンフレットにも記載している。家具類は全て持込可能で、入居後のリロケーションイメージを最小限に出来るように、本人・家族と相談しながら配置を決める。	居室には本人や家族の希望する生活用品や馴染みの家具、写真等を自由に持ち込んでいる。家族と相談して、これまでの暮らし方に出来るだけ近い配置にすることで、混乱を防ぎ居心地よく過ごせる配慮をしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	機械は一人で使えるように表示を工夫、家具は安全に歩行出来るように配置の工夫をするなど、常に入居者が安全に自立した生活を送れる事を意識している。		